

## 第5章 総括

### 旧石器時代

VI・VII層とVIII層より出土した。VIII層はブロックが1箇所、石材の主体は日東産黒曜石である。この黒曜石は不純物が多いために剥片剥離が困難であるうえ刃部が劣化しやすい。そのため剥片は不定形で小型のものが多く、製品はナイフ形石器1点（未完成）のみであった。

VI・VII層はブロックが2箇所あり、斜軸尖頭器1点、剥片尖頭器3点、ナイフ形尖頭器1点、角錐状石器1点が出土する。石材の主体はVIII層と同じく日東産黒曜石であるが、製品は斜軸尖頭器のみであり、他の製品は砂岩や流紋岩を用いている。これは距離が近く入手が容易な日東産黒曜石とは別に、製品の製作を目的として遠隔地の良質な石材を入手していたことを窺わせる。17・18は、そうした意図で持ち込まれた素材剥片と考えられる。

終末期には流紋岩製の船野型細石刃核も出土している。しかし出土はこれのみであり、詳細については不明である。

旧石器時代において複数の文化層を持つ石器群の調査事例は、近隣では小田元第2遺跡が挙げられる。本遺跡のVII層の石器群は小田元2期、細石刃核は小田元4期に比定できる。

### 縄文時代

縄文時代の遺物はB・C区とA区上段、遺構はC区北側に分布していた。

炉穴はC区北側から10基検出された。南側は5基が概ね東から西へ一直線に伸びており、北側では南北に2基、東西に2基確認した。土層断面の観察から、炉穴は9→8→7→5→4と、天井の崩落の度に構築し、台地縁辺部に延びたと推測される。このような現象は西都市別府原遺跡をはじめ宮崎平野でしばしば見られる（宮崎県埋蔵文化財センター 2002）。炉穴は熱により燃焼部の壁面が赤化したも多い傾向にある。炉穴は燻製した料理を作る施設と考えられており、本遺跡でも食糧加工を行っていたと考えられる。なお、前述の別府原遺跡では炉穴燃焼部でユリ科鱗茎の炭化物が採取され、縄文時代早期の植物食が想定されているが、本永寺原には同じくユリ科のノビルが多く自生している。炉穴底面付近で採取した炭化物を年代測定した結果は第IV章で述べたとおりだが、9,322BP～9,277BPとの結果が得られ、約50年間に集中して造られたと考えられる。

本遺跡では少量ながら中原II式、別府原式、吉田式、下剥峯式が出土した。いずれも南九州から中九州を分布域とする土器型式であり、撚糸文土器や押型文土器など異系統の土器は含まなかった。時期は下剥峯式を除いて縄文時代早期前葉に編年される。清武上猪ノ原遺跡では、他の遺跡で確認した年代測定結果も含め中原II式（9,200BP）、別府原式（9,200～8,900BP）、吉田式（9,200BP）、下剥峯式（8,960～8,880BP）としており、下剥峯式土器を除いて凡そ炉穴に近い測定値となった。

石器は、原礫の大きい日東産の黒曜石も確認されたが、原礫が小さくても石器製作に適した桑ノ木津留産の黒曜石が主体を占めている。石鏃以外の剥片石器や磨石・石皿類の出土は乏しいことから、加工場は調査区外に存在した可能性も考えられる。

なお、縄文時代早期末以降もC区から土坑や埋納土坑を検出した。このことから定期的な人

の往来が推測されるが、資料に乏しいこともあり詳細な内容は不明である。

## 中世

C区からは、Ⅲ層上面において中世の遺構が多く検出された。

検出された遺構は掘立柱建物6棟、土坑1基である。調査区の制約で掘立柱建物の規模が分かるものは2間×2間であることを確認した掘立柱建物5のみであるが、概ね2間×2間、もしくは2間×3間が主体と考えられる。なお掘立柱建物2は確認できた範囲で2間×4間であり、長辺に庇を伴うことから、掘立柱建物群でも中心的な施設であった可能性が推測される。

検出された掘立柱建物は規模の違いはあるが向きは東西方向より南東ー北西方向にほぼ統一していた。調査で検出された柱穴の密度から、掘立柱建物群の存在した期間は限定的と考えられる。これら掘立柱建物の用途としては倉庫や居館が推測されるが、詳細は不明である。

なお土坑については具体的用途は不明である。ただ埋土が似ていることから、掘立柱建物と併行または近い時期の遺構と推測される。

## 近世以降

A区の中段は、緩やかな斜面を平坦にするために大規模な造成が行われた。これは本永寺の寺域を整備するためと考えられる。

井戸は周辺の斜面を抉っていることから、中央を造成し寺が営まれた後、何らかの必要が生じたため、斜面を削って構築したと考えられる。なお井戸や石壙に用いられた切石は所謂「高岡石」である。これは高岡市街地と本永寺原の中間地点にある赤谷地区で切り出された溶結凝灰岩と思われ、軟質で軽く、加工しやすいことから宮崎平野でも広く用いられる石材である。

石囲遺構は、礫内側の黒変から、遺構内で火を用いたと考えられる。豊田浩章氏は石囲みを伴う遺構を分類する中で、石囲みを行い、底に石を敷かない施設について、火葬場や便所、人糞を堆肥化するための燃焼施設等の可能性を挙げている（豊田 1991）。なお北九州市小倉城下屋敷跡でも構造、規模共に酷似する石組遺構が検出されており、廁跡と報告している（財団法人北九州教育文化事業団 1998）。

廃棄遺構からは瓦、陶磁器が大量に出土した。出土した陶磁器は、一般的な碗や擂鉢等、庶民的な器種が主体を占めるが、少量ながら大皿、青物、白薩摩、輸入磁器などの貴重品も含まれており、藩から重視された寺院の一面を垣間見ることができる。出土した陶磁器の製作年代は近世後期～幕末が多い。これらは寺の廃絶時に寺に残存していた陶磁器と推測される。これらの陶磁器は2つに割れたものが多いこと、割れたもの同士が接合し完形になる事例が非常に少ないことも特徴であるが、調査範囲の制約のためと考えられる。また瓦については、廃絶に伴って寺院内の建物を解体したと推測される。

A区は本永寺廃絶後、切石を積んで石壙を設け、畠地としての利用が始まったと考えられる。なお石壙に隙間が多いのは、構成する切石が石壙を目的として切り出したのではなく、廃絶された寺院に残っていた石を用いたためと推測される。

今回調査したA区は、本永寺原の由来となった本永寺の縁辺部にあたる。調査面積は限られていたが、その中で石囲遺構や井戸、廃棄遺構などを確認した。これらは、山間部に営まれた

近世寺院と、その後の空間利用を窺うことができる一例として、今後調査を行うにあたり先鞭となれば幸いである。

(参考文献)

- 高岡町教育委員会編 1999『小田元遺跡 久木野遺跡（5～7区）』高岡町埋蔵文化財調査報告書 第17集  
高岡町教育委員会編 2003『小田元第2遺跡』高岡町埋蔵文化財調査報告書第29集  
野尻町教育委員会編 1990『新村遺跡・高山遺跡ほか』野尻町文化財調査報告書第4集  
佐々木真理 2005「日向における法華弘教の展開について」『宮崎県地域史研究』第18号  
豊田浩章 1991「関西における石積み土壙の諸問題」『関西近世考古学研究』II  
宮崎市教育委員会 2018「清武上猪ノ原遺跡第5地区」宮崎市埋蔵文化財調査報告書 第119集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2002「別府原遺跡 西ヶ迫遺跡 別府原第2遺跡」  
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第61集  
財団法人北九州市教育文化事業団 1998『小倉城下屋敷跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第222集